●江戸のコンポジション

徒然草の漢訳

川平　敏文（日本近世文学）

はじめに

高校生のとき、あまり得意ではなかった英語の授業のひとつに、コンポジション（英作文）という科目があった。現代では「読む」「書く」「話す」のうち、「話す」にかなり重点が置かれているようだが、私の頃までは「読む」がほとんどで、「書く」が申し訳程度に教えられていた、という印象がある。そのせいにするわけではないが、「読む」ことに比べて、「書く」（作る）のは暗がりを灯りなしに歩いているような、覚束ないものであった。

ところで、江戸時代、現代の英語に当たるような外国語とは何だったかといえば、漢文ということになろうか。もっとも、漢語は日本語の中にすでに溶け込んでいたから、単純に現代の英語とは比較できないが、やはり本格的な漢文を読むには、それなりのまとまった勉強が必要になった。その意味で、外国語といってもよいだろう。

江戸時代の寺子屋などでは、児童は手習い（習字）・算用を勉強するかたわら、『実語経』『童子経』といった日本製のテキストを使って、早くも漢文の読み方を習い始める。そうして、やや長じては『孝経』や四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）といった本格的な漢籍の勉強へと進んでいくのを常とした。すなわち、和歌・漢詩・俳諧・戯作・演劇などなど、さまざまな文芸ジャンルで活躍した文学史上の人物たちも、その少年期にはこういった漢文の知識・思想が叩き込まれているのである。その意味で、漢文は江戸文学の骨格をなしていると言ってもよい。私たちが国語の教科書の片隅で、これまた申し訳程度にちょこちょこっと習うのとは、土台が違うのだ。

しかし、そのような江戸人においても、漢文が「読める」というのと、「書ける」というのとでは大きな差があったに違いない。また「書けた」としても、その内容には自ずから、力量の差やその人の個性（時代性、学的立場）の違いというものが、表れてくるであろう。今回はそういった問題を、徒然草の漢訳というテーマから覗いてみる。

一　漢訳前夜　―岡西惟中―

まず最初にご登場願うのが、岡西惟中（おかにしいちゅう）という人の、その名も『真字寂寞草（まなつれづれぐさ）』（元禄二年刊）。「真字（まな）（名）」とは、平仮名や片仮名といった「仮字（かな）（名）」に対する言葉で、漢字と

いうこと。著者の岡西惟中は、談林俳諧という俳諧流派の論客として知られているが、儒学や禅学、古典学にも明るい該博の人で、徒然草についても『徒然草直解』（貞享五年刊）という本格的な注釈書を残している。その惟中が、今度は徒然草全篇を漢文に置き換え、しかもその訳文の根拠を頭注で記すという企てを試みたのが本書だ。

彼はなぜこのようなものを作ろうと思ったのか。これと同じような試みとしては、古く南北朝期に六条宮が撰したという、『真字伊勢物語』なる伊勢物語の漢訳が伝わっており、それに倣ったものであるということだけは確かである。あるいは徒然草を使って、和語／漢語の関係（訓読の要領）を教授するためのテキストとしたものでもあろうか。いま一つその意図は分からないが、ともあれ、その漢訳がどのようなものであるのかを見てみよう。たとえば徒然草・序段はこうなっている。

徒然有随（ツレヅレナルマヽニ）、終日（ヒクラシ）、松蘇利（スズリ）爾対而（ニムカヒテ）、情爾遷去無二来由一故（コヽロニウツリユクヨシナシ）乎（ゴト）、莫其許書摸者（ソコハカトナクカキウクレバ）、奇怪社狂計礼（アヤシウコソモノグルヲシケレ）。

いかがであろう。助詞の「に」を「爾」、「て」を「而」、「けれ」を「計礼」とするなど、一目これは正式な漢文ではないことが分かる。いわゆる変体漢文であって、万葉集などのごとく、正式な漢文と万葉仮名（一字一音表記）が混在したものである。

そして、この部分の頭注には、

・六条宮御撰『伊勢物語真字本』ニ、「徒然与籠居計利（ツレヅレトコモリヲリケリ）」。

・『鶴林玉露』十六ニ、硯ヲ「松蘇利（スズリ）」ト曰フ。筆ヲ「分（フ）直（テ）」ト曰フ。

と、訳出の根拠が述べられる。すなわち、前者は「つれづれなるままに」の「つれづれ」に「徒然」という漢語を宛てた理由を、後者は「すずりにむかひて」の「すずり」に「松蘇利」という漢語を宛てた理由を、それぞれ説明しているのである。頭注に挙げられる文献は他に、万葉集・日本書紀、文選・遊仙窟・白氏文集などで、「あさましく」は「甘身」（日本紀）、「きよらをつくし」は「究奇」（文選）などと、要所要所でこのような特殊な漢語を宛てがいつつ、全篇を「漢訳」していく。

漢語から和語へという、通常の作業とはちょうど反対の、和語から漢語へという作業であるから、惟中本人はさぞかし右脳も鍛われ、楽しんだかもしれないが、周囲の人々にとっては、「しかし、よくぞ最後までやり通しましたなァ」というくらいが、正直な反応だったのではなかろうか。

二　古文辞学派の漢訳（1）　―服部南郭―

徒然草の本格的な漢訳は、江戸中期のいわゆる古文辞学（こぶんし）派の登場以後に始まる。

古文辞学派とは、儒学者・荻生徂徠の門人たちを指す。それまで日本の儒学は、中国の宋代に成立した朱子学を学ぶのが主流であったが、徂徠は朱子学以前に遡って、もう一度自分の目で、中国古代の経典（例えば『詩経』や『論語』）を理解しようとした。そのためには当然、中国古代の言語、すなわち「古文辞」に通じておかねばならない。そこで彼は、その学習のための一助として、古文辞を使って実際に詩や文章を作る練習を門人に奨めたのだった。

その徂徠の高弟・服部南郭の著に、『大東世語』（寛延三年刊）なる書がある。中国の『世説新語』に倣い、奇特なる人物たちの伝を漢文体で綴ったもので、いわば日本版『世説新語』である。その中には徒然草に取材した箇所もたくさん見える。

盛親僧都（芋がしらを無性に好んだことで有名。本誌第二号で紹介）の話も、その一つである。ここでは徒然草・第六〇段の前半部が漢訳されているのであるが、さてどのような趣となっていようか。読みやすさを考慮して、書き下し文で示そう。なお適宜〈　〉内に、解釈の助けとなる訳語を入れている。

僧都盛親〔割注・真乗院に居す。能書博学。弁論無敵。一宗法灯と称す。飲食昼夜、節限を作さず。独り自ずから意に任す〕

任達不羈、甚だ芋魁〈芋頭〉を嗜む。談義の座側、大盂に佇盛し、且つ啖ひ、且つ論ず。未だ始めより人に進めず。病有れば必ず芋魁の殊に美なる者を択び、閉居して飽食す。疾、亦た誠に癒ゆ。

生平〈ふだん〉居、貧し。其の師、死するとき、一坊及び銭二百緡〈緡は銭を刺し通す縄〉を遺す。亦た坊を百緡に売る。都て三百緡を将て挙げて人家に託し、稍稍に〈少しずつ〉取給して、芋を辦す〈そなえる〉。他事に用いること無し。亦た復た幾ならずして皆尽く。

まず、本文冒頭に「任達不羈」とあるが、これは原文にはない。自由気ままで礼法などにこだわらないという意で、南郭は盛親僧都のキャラクターをこの四字に集約して、読者に最初に提示したのである。以下、原文の要所をしっかりと押さえながら、逐語的に訳していく。試みに右に紹介した文章の第二段落目の原文を示すので、対照してみられたい。

極めて貧しかりけるに、師匠、死にさまに、銭二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に売りて、かれこれ三万疋を芋頭の銭と定めて、京なる人に預け置きて、十貫づつ取り寄せて、芋頭を乏しからず召しけるほどに、また、他用に用ゐることなくて、その銭皆に成りにけり。「三百貫の物を貧しき身にまうけて、かく計らひける、まことに有り難き道心者なり」とぞ、人申しける。

原文にかなり忠実な訳文であることがお分かりいただけるだろう。なお原文の最後にある、盛親を評判した一文は、南郭訳では省略されているが、これは奇特なる人物の伝を集めた『大東世語』という本のコンセプト上、言わずもがなと見なされたものでもあろうか。

南郭訳については、また後述する。

三　古文辞学派の漢訳（2）　―宇野明霞―

古文辞学者の漢訳をもう一つ見てみよう。

京都の儒者・宇野明霞（うのめいか）の詩文集『明霞先生遺稿』（寛延元年刊）には、徒然草の七つの章段の漢訳が収められている。それらの前文として、明霞はこんなことを言っている。――僧兼好の書（徒然草）は、いま広く流布している。ただしそれはみな和文で書かれていて、「固より観るに足ら」ないものだ。とはいえ、その中には当時の出来事を述べたもの、あるいは卑近日常の出来事で、他書には見えぬものもある。そこで暇なときに、これを漢訳してみた、と。

ここでは、本誌第五号で紹介した徒然草・第五三段、鼎の段を見てみよう。こちらは南郭のそれのように原文に忠実というわけではなく、細部に明霞の解釈を含んだ脚色が見られる。例によって原文を書き下せば以下のごとし。

仁和寺に又一僧有り。一日、諸僧集飲し、各所能〈手持ちの芸〉を出して以て戯れ歓ずること甚し。時に其の僧、小鼎を冒（かぶ）りて出る。鼎、尽（ことごと）く其の首を呑み、黒臀黔然として〈尻もくろぐろと〉、三足倒立す。忽（たちま）ち俄然として傾き、又矗然として竪（た）つ。婆娑として〈衣が翻るさま〉其の舞ひ其の面を見ず、唯だ襟領〈えりくび〉以て前後を弁ず。傲々〈かたむくさま〉や、僊々〈軽く飛び上がるさま〉や、傞々として〈酔って舞うさま〉東且（ま）た西、盃に躓（つまづ）き、尊（たる）に触れて醜態横出、衆皆絶倒、其の歓すること益（ますます）甚し。或は喧呼抃手〈大声をあげたり手を打ったり〉して之を助け、或は捧腹して仰覧すること能はず。

まず仁和寺のある僧が、酒宴を盛り上げるため、小さな鼎をかぶった。ここまではだいたい原文に忠実である。その次の、「鼎、尽く其の首を呑み、黒臀黔然として、三足倒立す」は原文にない部分で、鼎がすっぽりとその首を呑みこんだと擬人的に表現しているところが面白い。さらに、鼎が真っ黒なおしりを見せて、三つの足を立てて逆立ちしていると見立てるのも、なかなか秀逸だ。

さらに原文にない文章が続く。「鼎」は、にわかに傾いたかと思えば、また、すっくと立つ。衣を翻して踊り舞うが、前がしっかりと見えているわけではなく、襟もとから下を覗いて前後を判断しているような状況である。傾いた

り飛び上がったり、あっちに行きこっちに行き、盃につまづき樽にぶつかり、とにかくハチャメチャな乱れよう。

「衆皆絶倒、其の歓すること益甚し。或は喧呼抃手して之を助け、或は捧腹して仰覧ること能はず」。皆はそれを見て笑い転げ、大声で叫んだり手を打ったりして、「鼎」を囃し立てる。ある者は腹を抱えて大笑いし、そのあまりの可笑しさに、もはや仰ぎ見ることさえできない。

とまあこんな調子で、酒宴の場を活写している。頭の上で逆立ちしている鼎がぴょこぴょこと動くさま、そしてそれをかぶった坊主がものも言わずに（実際には何か言っているのかもしれないが、鼎の外には聞こえないのである）ふらふらと舞い踊り、あちらこちらにぶつかるさま、さらにはそれを見て笑いのツボにはまり、「腹の筋が捩れて苦しいから、もうやめてくれ」などと言いながら畳にうっぷしているさま。鼎をかぶったことがない人でも、あるいはここまで乱れた酒宴の経験がない人でも、多くの人がこのような異常なノリは想像できるであろう。原文にはないそれを、明霞先生はしっかりと書き込んでくれたのである。

しかもここに使われている用語はいわゆる古文辞で、中国古代の文献に典拠をもつような、いわば由緒正しい言葉である。たとえば「傲々」「僊々」「傞々」などといった擬態語、これらは『詩経』を出典とする、格調高い古典語であった。

四　古文辞学派を駁す　―山本北山（1）―

ところで、このような古文辞学派の文章を最も毛嫌いしたことで知られているのが、山本北山という儒学者である。その若きころの著『作文志彀』（安永八年刊）に、「徂徠・南郭ナドノ文ヲ的ニシテ、徂徠ノ文ニ此アリ、南郭ノ文ニ此アリナンド、云テ、文章ニ用ルコソ片腹イタク危キコトナリ」と、徂徠・南郭を口を極めて罵っている。

北山は続けて言う。今の世の人は、徂徠・南郭といえば神様のように思って、その奴隷となっている。これはみんな、徂徠に「誑サル、ナリ」。世の人は古文辞でなければ時流に合わないように思い、これを律令のように考え、「修辞、修辞」と口うるさく言い立てて、古人の文章を剽窃している。悲しきかな、と。

しかしその北山も、「余れ数年の精力を古文辞に用て、其を修し得て後に、其の非を悟るなり」（『作文率』寛政十年刊）とあるように、はじめ古文辞を勉強したが、のちにその非を悟って、中国明の文人・袁中郎風の、「性霊ヨリ発シテ古ニ拠ラズ、能ク物々事々、其ノ委曲詳密ヲ尽」（『作文志彀』）す、簡単に言えば平明で自由な文章を好しとするに至ったという。

その北山が、南郭の古文辞による徒然草漢訳を滅多切りにしたものが、『作文率』に載っている。南郭が訳したの

は徒然草・第一七七段で、内容はこうである。鎌倉の中書王が蹴鞠の会を催そうとしたが、あいにく前日の雨で、庭がぬかるんでいた。しかし佐々木隠岐入道が大量の鋸屑を庭に敷きつめさせたので、会は予定どおり執り行われた。みな入道の準備の良さに感心していたが、ひとり吉田中納言は、「どうして乾いた砂を用意していなかったのか」と仰った。乾いた砂の用意は、蹴鞠の会を預かる者の故実（古来からの慣わし）のよし。これを聞いて入道の「鋸屑」は、とたんに賤しいものになってしまった、というもの。

まずは南郭の文章全体を書き下しで掲げる。

鎌倉中書王蹴鞠の会に、雨場未だ乾かず。俄にして左隠州、鋸屑を車載して之を進む。乃ち場に撒して、湿妨無きことを得たり。後に或いは陶侃が事を憶ひ、其の幹有ることを賞す。吉田黄門の曰く、故事に乾沙を儲くること有り。鋸屑の陋、何ぞ必ずしも嗟賞せん。

先の盛親僧都の話と同様、これもかなり逐語訳に近いものに見える。しかしこの文章に対して、北山はまさしく徹頭徹尾、厳しいコメントを寄せている。そのいくつかを見てみよう（北山のコメントは現代語訳した）。

◇「鎌倉中書王蹴鞠会に、雨場未だ乾かず」

本文には雨が降った後とあるのに、「後」の字がなくては、雨が降っている最中のように読めてしまう。「未だ乾かず」の「未」が生きてこない。これは簡潔で古めかしく言おうとしたための弊害である。

◇「乃ち場に撒して、湿妨無きことを得たり」

「撒」は「まく」「ちらす」ということ。これは和習（日本的な言い方）である。「布」（しく）としなければならない。

◇「後に或いは陶侃が事を憶ひ、其の幹有ることを賞す」

これは徒然草の本文には全く関係がない。原文の、「とりためけん用意ありがたしと、人感じあへりけり」という語が訳しにくいので、このような拙い句を付け加えたのだ。

◇「吉田黄門の曰く、故事に乾沙を儲くること有り。鋸屑の陋、何ぞ必ずしも嗟賞せん」

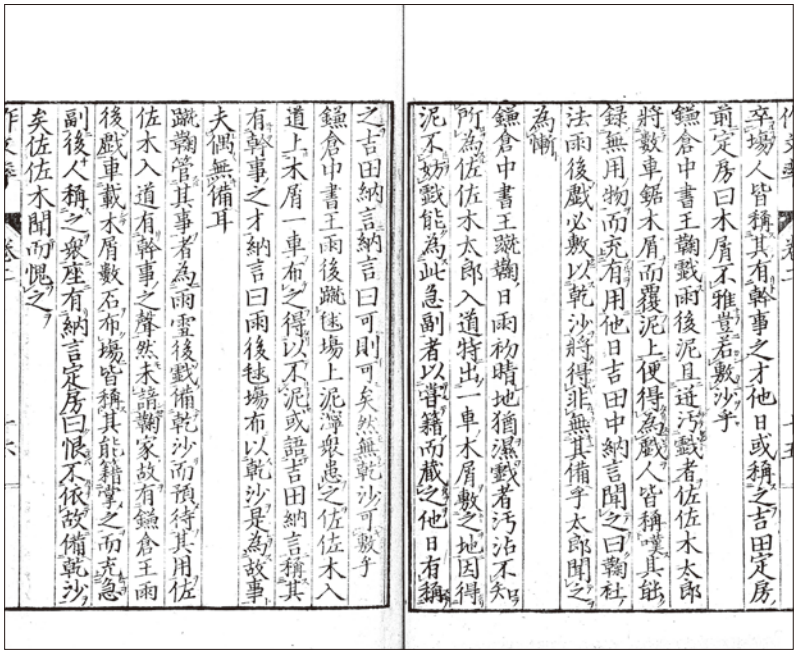
一般に、文章というのは人の伝記を記すときは、その人柄を映し出すのが大事だ。有徳（富裕）の人は有徳らしく書き、暴戻（ぼうれい）（荒々しく道理にそむき悖る）の人は暴戻らしく書くのである。徒然草に、「吉田中納言の、乾き砂子の用意やなかりける、とのたまひし」とあるのは、吉田殿の優美なありさまが、なるほどと推し量られる。それを「鋸屑の陋、何ぞ必ずしも嗟賞せん」（鋸屑のような下品なものを使ったのは、どうして誉められたことであろうか）というときは、器の小さい人間

が言い争っているときの口ぶりである。吉田殿のような君子の口ぶりに、このような野鄙な言葉があろうか。

などといった具合に、彼は南郭の漢訳を酷評する。さらにそのあと、自分自身の試訳として、原文を短く縮めた文体、長く引き伸ばした文体、それから微妙な変化をつけた文体など、六体を出す。よくもここまで書き分けられたものだと感心するが、参考までに、短いものを書き下しで掲げてみよう。

鞠社、雨霽後の為に事を掌る者、予め乾沙を備ふを故事と為す。鎌倉中書王、雨後鞠を蹴るに此の備へ無し。是の日、佐佐木入道、之の事を管す。乃ち数斛の木屑を将ひて、場に布き、以て事を卒ることを得たり。衆、皆之を悦ぶ。吉田中納言は達者なり。独り之を笑ふ。

原文とは反対に、まず冒頭に結論を切り出しておいて、次に事の経緯を記す。最初に種明かしがしてあったので、読者はなぜ、最後に吉田中納言が笑っていたかを知っている、という仕掛けだ。面白いが、こうなると文章の構造まで作り変えているわけで、訳の領域を超えてしまっていると言われるかもしれない。


卒場人皆稱其有幹事之才他日或稱之吉田定房前定房曰木屑不雅豈若敷沙乎
鎧倉中書王鞠戯雨後泥且逆汚戯者佐佐木太郎將數車鋸木屑而覆泥上便得為戯人皆稱嘆其能録無用物而充有用他日吉田中納言聞之曰鞠社法雨後戯必敷以乾沙將得非無其備乎太郎聞之為慚
鎧倉中書王蹴鞠日雨初晴地猶濕戯者汚沾不知所為佐佐木太郎入道特出一車木屑敷之地因得泥不妨戯能為此急副者以嘗籍而載之他日有稱之吉田納言納言曰可則可矣然無乾沙可敷乎
鎧倉中書王雨後蹴毬場上泥濘衆患之佐佐木入道上木屑一車布之得以不泥或語吉田納言稱其有幹事之才納言曰雨後毬場布以乾沙是為故事夫偶無備耳
蹴鞠管其事者為雨霽後戯備乾沙而預待其用佐佐木入道有幹事之聲然未諳鞠家故有鎧倉王雨後戯車載木屑數石布場皆稱其能籍掌之而充急副後人稱之衆座有納言定房曰恨不依故備乾沙矣佐佐木聞而愧之

『作文率』（寛政十年刊）

五　白話体の習作　―山本北山（2）―

この六体のあと、さらに北山は、白話体の訳文の例も記している。白話とは何か。

たとえば、有名な『三国志演義』や『水滸伝』などは、明代に成立したと言われており、また同じ漢文でも、『論語』や『史記』などと違って当時の口語に近い文章で書かれている。これが「白話」で、わが国でも江戸中期以降になると、広い意味での中国学の一環として、漢学者たちはこの白話で書かれた小説類を好んで読むようになり、またそれを翻訳・翻案するようなことも、頻繁に行うようになった。

特にこの白話、というより唐話（中国語会話）の学習を強く奨めたのは、先に見た荻生徂徠であった。徂徠は、漢文を訓点（読み方や返り点）に頼りつつ、たどたどしく読んでいるようでは、その文章の真意は理解できないと考えた。そこで〈生きた中国語〉を学ぶことによって、中国人の思考回路を体得すべし、と教えたのである。

それに対して山本北山は、唐話は正式な文章（漢文）の学習には罌粟ほども役に立たない、と啖呵を切る。唐話は、現代の中国人と会話する際には良いかもしれないが、書物を理解するときには役に立たないし、文章を作るときにはもっと役に立たない。なぜなら、文章とは基本的に「古人の言」を文字に綴るものであって、現代の唐話とはあまりに異なっているから、と（『作文志彀』）。

北山は続けて言う。唐話に通じていなければ、白話は読めない、あるいは作れないという人がいるが、それも間違いだ。自分も幼いころ、好んでこうした白話小説を読んでいた。唐話はできなかったが、『水滸伝』『西遊記』『龍図公案』などの書は読めないことはなかった。そもそも白話は正式な文章よりも簡単なのだ、その証拠を見せようといって、『板倉政要』の一節かと思われる文書を白話訳してみせる。

その出来の善し悪しは筆者には分かりかねるが、そのような人だから、徒然草の白話訳もお手の物であった。彼が例の「鎌倉中書王の蹴鞠」の段を「小説体」で書いた文章を、『作文率』巻二から抜き書いてみる。これは書き下しではなく、原文の雰囲気をそのまま味わってもらおう。

話説。鎌倉王要和三五侍臣踢気毬。当日雨初霽了。庭心裡都是泥土叵下得場。王太懊恼。王府一箇親隨姓佐佐木排行第一、叫做太郎左衛門、亶王道、「不妨大王放心。小的自有道理幹弁事件」。便自去分付差人、不多時、就牽一輛車子、載送鋸截的木屑、来進献。斉斉整整密布場上。王大歓喜道、「怎的如許収拾如梁如丘」。座上箇箇也歓天喜地、遂得下場来蹴幾回耍。那時伝得鎌倉一府七郷知佐佐木名、不在話下。

它日王府裡士対二吉田中納言一、一五一十説二知這般事一、称二嘆那才幹任レ用。中納言听了道、「恁地倒不レ如下搬二了乾沙一敷将来的雅観上。他也収拾不レ曾。奈不レ暁二得円社故実一」。府裡士被二中納言説難一、呆然吃二了一驚一、辞還隨即知二道佐佐木太郎左衛門一。佐佐木太郎左衛門听得自羞縮、関二上大門一、不二外出一数日。

冒頭の「話説」は、そもそも、という言葉。以下、「排行」は兄弟の序列、「叫做」は呼びなすこと、「放心」は安心する、というように、普通の漢文ではあまり見掛けない単語が多く出てくる。これがいわゆる白話であるが、実はこれらの語の多くは、当時の白話小説やその辞典類を繙けばすぐに見出されるような、ポピュラーな単語ばかりである。つまり、それだけ類型的な文章ということだ。

たとえば北山は、雨でぬかるんだ庭を前に困っている鎌倉王に向かって、佐々木が「不妨大王放心、小的自有道理幹弁事件」（王様、ご安心なさいませ。私めに、これをどうにかする方法があります）と言ったと訳している。これは『水滸伝』第二に、「不妨母親放心、兒子自有道理措置他」とある言い方と、ほとんど同じ構文であることが分かる。これは単なる偶然の一致ではなかろう。

しかし一方で、たとえ類型的な文章とは言っても、書かれている内容を読むことと、白話を使って自由にものを書くこととの間には、やはり大きな差がある。確かに当時、白話小説は流行したが、かといって誰もが北山のように、易々とそれらしい白話体の漢文を作れるというものでもない。その意味で北山先生の才能は、一応認められて然るべきであろう。

おわりに

同じ話を数種類に訳し分けるという、ある意味「曲芸」のような北山の技を紹介したが、その後も同じ物好きを試みた例がある。瑞花和尚なる人物の『一笑七変』（文化元年跋・刊）という小冊がそれで、徒然草・第八八段に見える笑話を、七通りに分けて漢訳している。本書にはさらに、その門人と思われる道振・道宣らの試訳も数通り付されているから、その訳のバリエーションは十数種に上る。何ともご苦労なことではあり、こうなると一種の戯作と言ってもよいかも知れない。

ここで思うのは、なぜ徒然草はこのように漢訳の対象として好まれたのか、ということである。伊勢・源氏の漢訳というのは、寡聞にして聞いたことがない。もっとも冒頭で述べたように、伊勢には真字本というのがあるが、これ

は一応、古くから伝来している本ということで、江戸人の新作ということになっていない。

再び問う、なぜ徒然草は漢訳されたのか。一つにそれは、章段が短編として完結しており、素材として使いやすかったという点が挙げられるだろう。しかしながら、それだけならば伊勢とて同じこと。あるいは枕草子などでも作り得たはずであるが、それは伝わっていない。とするならばその要因はやはり、徒然草の内容そのものに求めるしかない。

卵が先か、鶏が先かという議論に似ているが、蓋しこれは、徒然草の内容あるいはその文体が、漢籍に大きな影響を受けていたことと無関係ではないであろう。その点、江戸の漢学者にとって、徒然草は比較的馴染みやすい「和文」であり、伊勢や源氏などとは截然と一線を画す存在だった（拙稿「慶長文壇と徒然草」、『国文研究』47号）。彼らの考える伊勢物語と徒然草、枕草子と徒然草の間には、現代人には容易に計れない距離が横たわっている。徒然草の漢訳は、そのような徒然草の内的特質を、一面で物語ってくれているわけである。

※『明霞先生遺稿』の引用に当たっては、高橋昌彦氏に資料の貸与を受けた。記して御礼申し上げます。